

大学院派遣研修報告書

所属校	東京都立拝島高等学校	氏名	大久保 正明
派遣大学院	上越教育大学大学院	専攻・コース	教科・領域教育専攻 社会系コース
研究テーマ	高校地理学習における地域調査の現状と改善に関する一考察 —調査の基礎的な視点と方法を中心にして—		

1.研究の概要

a).研究目的

本研究の目的は、高校地理学習における地域調査の実施状況の把握と改善を大きな目的とする。従来から地域調査の重要性が高く認識される一方で、実施状況は長期間に及んで低迷する実態が指摘され、改善されないままに今日に至る。また、地理の地域調査には教師に優れた指導力が必要とする捉え方、長年の経験や勘が必要とされる考え方が支配的に存在する。つまり、地域調査実施に対する理想と現実に大きな乖離が問題として存在する。以上の背景から、高校地理学習の地域調査の実施状況は、具体的にどうなのか。また、問題点から改善の方向性はどのように見出せるかを研究目的とした。

b).内容

本研究では、次の内容を大きな視点として研究を進めた。

- ア).先行研究から地域調査の問題点の整理
- イ).地理学習における地域調査の位置付けと学習指導要領と教科書分析
- ウ).東京都の全高校に対し地域調査に関するアンケートの実施
- エ).地域調査の実践からの分析
- オ).地域調査の改善策の提示

尚、本研究における地域調査の定義は、短時間の観察・巡検から、半日或は一日の調査・巡検、宿泊を伴う地域調査までと広範囲な学習活動を含める。

c).成果

第一は、先行研究から高校地理学習の地域調査の問題点を整理した。地域調査が長期間に及んで実施率の低いことが指摘出来た。例えば、岐阜県の実施率 35%(1969年)、愛知県の実施率 6%(1980年)、大学生に高校時代の地域調査実施の有無の調査では 5%(2000年)等である。また、同様な全国的な調査として国立教育政策研究所教育課程研究センターの調査(2005年)では、実施率が約 10%である。また、低迷する実施率の背景には内的要因と外的要因が以下にまとめられる。

地域調査の実施を阻害する内的要因と外的要因

1. 内的要因・・・授業時間の不足・生徒の関心及び意欲・教師の指導力など
2. 外的要因・・・指導体制・学校全体の多忙化・時間設定・調査地域など

第二は、地理教育における地域調査の重要性をまとめた。一つは、地域調査の意義である。高校地理教師は、地域調査の意義を次に見出している。具体的には、生徒の興味及び関心を高める学習の意義、体験及び経験から学ぶ学習上の意義、学習のプロセスに学ぶ意義等である。また、地域調査を経験した生徒自身は、調査地域での発見及び問題への気付きでの学び、現地の人との交流、学習への取り組みに学ぶ等に意義を見出している。他の学習と異なる学習の意

義を見出していることが指摘出来る。二つは、地理教育における地域調査の意義である。国際地理教育憲章から、地理的技能の習得に地域調査が不可欠であることを考察した。例えば、地理的課題に対する思考、調査、資料分析、地図等の活用である。三つは、学習指導要領から「地理 A」・「地理 B」の地域調査の内容を以下に考察した。また、教科書に掲載される地域調査分析では、調査方法が網羅的あること・工夫が求められているが漠然としていること・授業時間確保等から実施の実現度は低いと考察した。

『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』地域調査のまとめ

	調査場所	調査内容	調査の視点
地理 A	生活圏・行動圏⇒通学圏	世界と結びつく諸事象⇒例として、外国旅行経験者・外国人留学生・日常生活の輸入品・貿易・外国企業などの例	世界と結びつける
	地域調査の際に生徒自らが地理的事象を見出し、課題を設定し、調査方法などを工夫して調査を行うことを想定。		
地理 B	生活圏・行動圏⇒通学圏	地域の特徴的な事象・土地の多様な事象	多面的・多角的⇒地誌的
	生徒自らが地理的事象を見出し、事象間の関連の発見を体験し、地理的に考察することの興味深さを実感できるよう取り扱うことが望まれる。		

出典：文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版、1999年、p.157-254より筆者作成。

第三は、東京都の全高校 531 校(国立・都立の全日制及び定時制等・私立)に地域調査に関するアンケートを実施した。従来に同様な主旨の実施状況に関する調査があるが、質問項目及びサンプル数が少なく、本アンケートは従来に無い規模の調査で地域調査の東京都の全体像を把握することを大きな目的とした。郵送による実施で回収率 30%(157校)、地域調査の実施校 42校・地域調査の未実施校 80校・地理の教科設定の無い 35校である。実施校の結果のポイントは、以下の通りである。実際の地域調査は、分類すると半数近くが観察・巡検であり、半数が調査であること。つまり、学習指導要領にある地理の地域調査は非常に低い実施状況が考察出来た。

東京都の高校地理学習における地域調査の実施状況(42校)

- | | | | |
|----------|---|--------------|-----|
| 1. 学習の期間 | ⇒ | 一ヶ月未満 | 56% |
| 2. 授業時間 | ⇒ | 3時間以内 | 45% |
| 3. 調査時間 | ⇒ | 授業時間内 | 20% |
| | | 2時間連続授業時間内 | 42% |
| 4. 指導体制 | ⇒ | 一人で指導 | 68% |
| 5. 実施形態 | ⇒ | 教師引率による観察・巡検 | 54% |
| | | 教師引率による調査 | 21% |
| | | 教師引率なしの調査 | 25% |

注記：地域調査を実施している 42 校のまとめ。

また、本アンケートでは、地域調査に対する教師の指導力に注目し、以下の回答結果を得た。地域調査に対する教師の指導力は、実践者と未実践者で多少の差があるが、どちらも必ずしも高くない。そして、指導力を補う手段として研修会などへの参加を希望する者が半数以上に及んでいる。また、地域調査に関する事例集などの情報提供を希望する者も半数以上に及んでいる。以上の地域調査の低迷の原因と地域調査の実施状況を視点として地域調査の改善策を考察することが必要と考えた。すでに指摘した授業時間確保の問題、教師の指導力の問題から一つの改善の方向性は、少ない時間で多くの教員が活用出来る汎用性のある地域調査の方法開発が必要と考え、従来の実践事例を分析し、地域調査の概念の枠組み作成と具体的な調査の視点の提示が必要と考察した。

地域調査における教師の指導に関して

	十分に習得している	ある程度習得している	どちらとも言えない	やや不足している	かなり不足している	回答者数
地域調査実践者	4人 (11%)	15人 (41%)	5人 (13%)	7人 (19%)	6人 (16%)	37人 (100%)
地域調査未実践者	5人 (7%)	20人 (26%)	22人 (29%)	11人 (14%)	18人 (24%)	76人 (100%)
合計	9人 (8%)	35人 (31%)	27人 (24%)	18人 (16%)	24人 (21%)	113人 (100%)

注記：アンケート 113 人の回収結果。

第四は、地理の地域調査の枠組みを作成した。従来の実践例では、“地理”の視点が必ずしも明確でない事例がある。そこで、地理の視点を以下の枠組みで整理した。また、生徒の地域調査実施後の感想では、地域性の発見に喜びを見出している。この点から、地域を空間的側面・時間的側面・関係的側面とし、課題ではパターンの発見を重視した地域調査が重要と考えた。授業時間の確保が十分に出来れば、パターンの発見→要因の説明→意味の解釈→応用へと結びつけることが可能になる。

地理の地域調査の枠組み

研究対象 研究課題	調査対象地域		
	空間的側面	時間的側面	関係的側面
パターンの発見	<ul style="list-style-type: none"> どこにあるのか？ どんなところか？ どうしてそこなのか？ どこまでひろがるのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> いつからなのか？ いつまでなのか？ どうへんかしたか？ どうへんかするか？ 	<ul style="list-style-type: none"> どんなまとまりか？ どんなかんけいか？ どんなつながりか？ どんなえいきょうか？
要因の説明			
意味の解釈			
応用			

出典：中川正「地域研究の方法」『シリーズ人文地理学 2 地域研究』2003年 朝倉書店 pp.25-52、筆者追加。

第五は、汎用性のある地理の地域調査の視点から考察した。あるイギリスの商店街の調査方法から示唆を得た。注目点は、身近な商店街を個人経営店かチェーン店かの対立する概念を用いて 50 店を 30 分で調査し、オリジナルなデータから商店街の特徴を判定する方法である。すでに、一般市民の参加により 100 ヶ所以上で調査が実施された。また、各地の商店街と比較し、共通性・差異性が発見出来る。身近な地域の商店街がどこでも同じチェーン店が増大することに疑問を持ち、望ましい経済のあり方を提案している。示唆を得た対立する概念を空間的側面・時間的側面・関係的側面から考察すると以下にまとめた。また、本事例の商店街調査を日本での実施と類似する調査 2 事例実施の結果から対立する概念を用いた調査方法の利点をまとめた。

地理の地域調査における対立する概念の一例

空間的側面	遠い／近い、市内／市外、県内／県外、国内／国外、水田／畑地、平地／山地、密集／分散、安全／危険、東西／南北 など
時間的側面	古い／新しい、早い／遅い、平日／休日、車／徒歩 など
関係的側面	男性／女性、子供／大人、若い人／年配の人、本社／支社 など

注記：対立する概念は上記の他に様々にある、生徒に上記の事例を見本とし、生徒に対立する概念を検討させる。

対立する概念を用いた汎用性のある地域調査の利点

1. 調査対象が二つで絞込みが出来ること

- 2.調査方法が容易になり、誰にでも活用出来ること
- 3.調査時間が短時間で出来ること
- 4.収集したオリジナルなデータで結果が明確に出ること
- 5.多数の地域の実施が可能になり、他地域との比較が出来ること
- 6.調査地域を分割し、結果を統合することで広範囲な調査が可能になること

第六は、高校地理学習における地域調査の改善をまとめとして提案した。すでに指摘した問題点である授業時間及び教師の指導力に注目した。これら問題点を克服する手段として対立する概念を用いた汎用性のある地域調査の方法を中心に以下にまとめた。まだ、実践による十分な検証を得ていないが、現状の改善の視点として示唆することが出来た。今後は、高校地理学習において生徒と共に意義ある地理の学習活動として実践を重ねて行く必要があると考える。

汎用性のある地理の地域調査のまとめ

- | | | |
|---------|---|------------------------------|
| 1. 条件 | → | 身近な地域・生徒の興味及び関心・限られた時間 |
| 2. 内容設定 | → | 空間的側面・時間的側面・関係的側面×対立する概念 |
| 3. 実施 | → | 現地での調査実施・目で確認出来る対象・オリジナルなデータ |
| 4. 考察 | → | データ整理・地図化・報告書 |
| 5. 結果 | → | 地域性の発見 |

2.学校等における研修成果の活用計画

a).授業活用

本研修成果を授業活用で還元する。本研究は、高校地理学習における地域調査の改善が大きな目的である。従って、授業実践において地域調査の実践し、本研究の成果を検証する。また、授業実践から地域調査の可能性を多面的に追求し、多くの授業実践で活用できる調査方法をより一層充実させたいと考える。

b).研修会計画

高校地理学習における地域調査の改善には、教師の指導力向上が必要不可欠である。従って、本研修成果を次の点からの還元を考える。

一つは、高校地理における教育団体である全国地理教育研究会及び東京都地理教育研究会を中心に研修会を実施する。具体的には、定期的開催される研修会での発表、研究会報への論文投稿である。また、地域調査を中心にした本研究では、地理担当教師を中心に地域調査の方法に関するセミナーなどの実施を計画・実施したいと考える。また、地理教育に関連する学会発表及び学会誌への投稿、広く成果を地理教育に還元したいと考える。

二つは、将来的に大学生、中学生及び小学生或は社会人等に対し、地域調査の実施などを計画したいと考える。また、地域調査に関連する部分として都内巡検や地域観察、地理ウォーキングなどの企画を実施し、広く一般都民に還元したいと考える。

c).その他

今後は、海外の地理教育関係者及び大学等の研究機関とも連携を図り、国内外での地理教育におけるより良い地域調査の実現に向けた共同研究を進めて行きたいと考える。

大 学 院 派 遣 研 修 成 果 活 用 状 況

所属校	東京都立府中西高等学校	氏名	大久保 正明
派遣大学院	上越教育大学大学院	専攻・コース	教科・領域教育専攻
研究主題	『 高校地理学習における地域調査の現状と改善に関する一考察 —調査の基礎的な視点と方法を中心にして— 』		

ここでは、大学院派遣研修の成果活用に関して、大きく下記の3点からまとめる。

1 所属校での 成果活用	<p>a).授業での成果活用</p> <p>高校地理学習における地域調査は、具体的実施することが要請されていることはもちろんであるが、地域調査的発想は普段の学習においても発揮されなければならない。そこで、生徒の視点から、日常生活における地域と地域の関係、交通の発達と物流、通信の発達などから地域を見る視点を学習内容に取り込んで授業実践を実施している。</p> <p>b).地域調査の実践</p> <p>従来の地域調査の実践では、時間の制約等による実施状況の低迷が指摘される。そこで、今後の授業においては、時間的制約を考慮した小規模な地域調査の実践を計画している。担当クラスにおいては、生徒の日常における身近なテーマとする。調査地域及び調査内容をグループなどにより分割・統合する形式で実施する。最終的には、地図でのまとめとする。</p>
2 研修会等での 成果活用	<p>a). 第51回 全国地理教育研究会 東京・新宿高校大会での発表</p> <p>実施日 平成18年8月2日(木) 東京都立新宿高校にて</p> <p>参加対象者 全国の高校地理教師</p> <p>参加人数 全国からの15名の教師(沖縄・福岡・岡山・埼玉・栃木・東京)</p> <p>高校地理教育関係者の全国的組織である全国地理教育研究会の夏の研究大会で研修成果を発表及びワークショップの形式で参加者とともに地域調査を実施した。従来、高校の地理学習における地域調査は実施率そのものが低い現実がある。そこには、校外での実施・授業時間の制約などが問題点としてある。そこで、『小さな地域調査』をテーマとしたが、実施が容易な地域調査のあり方を発表と実践をした。</p> <p>具体的には、大会の会場近くの新宿3丁目を調査対象地域とした。調査内容は、高層ビルの集中する中で低層階(1・2・3階)である建物に注目し、分布と理由及び傾向を調査内容にした。当日は、約20分程度で地域調査の概要を説明し、参加者のグループ分け、調査地域の分担をした。約1時間程度の地域調査を実施し、あらかじめ用意した地図に低層階を示すシールを貼る、また、聞き取りの内容をシールに記入し地図に貼る形式で分布図と聞き取り内容を地図上にまとめ、完成させた。</p> <p>参加者の感想では、短時間でも有意義な地域調査の可能性があることが理解できたとするものがある。ポイントは、対象地域を参加者で分担したこと、調査対象が目で確認しやすいこと、聞き取りを重視したこと、シールを活用した分布図を作成したこと等が上げられる。</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">2 研修会等での成果活用</p>	<p>まず調査を実施することでいくつもの新鮮な発見を見出すことが出来る。こうした発見を後の学習に結びつけることが一つの方法であると考え。</p> <p>b). 教員養成課程大学での地域調査に関する講習 実施 平成 18 年 8 月 参加対象者 北海道教育大学函館校 参加人数 教員志望の学生 50 名</p> <p>小中高における地理学習の地域調査の実践では、担当する教師の指導力の重要性が指摘される。この点から、教員養成課程での指導者育成も課題である。そこで、将来の教育現場で容易に活用できる基本的な地域調査の指導を実施した。</p> <p>具体的には、大学の所在する函館において学生たちがそれぞれのテーマを設定し、グループで短時間の地域調査を実施する内容である。住み慣れた地元の街であるが、視点と工夫により、新たな地域性の発見があり、学生より将来の教育現場での実践の参考になるとして高い評価を得た。</p> <p>c). 研究会報・学会等における論文発表 全国地理教育研究会の機関紙『地理のひろば』 2006 年 10 月発行 日本地理教育学会学会誌『新地理』に投稿予定</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">3 成果を生かした研究授業等</p>	<p>今年度は実施していない。今後、積極的に研究授業等、実践を積み重ねていく。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">4 今後の成果活用計画</p>	<p>a). 授業実践における活用 地域調査の実践には、様々な制約がある。これらを克服するべく小規模で、生徒が実施しやすい汎用性のある地域調査の方法開発を授業実践で継続、蓄積する。</p> <p>b). 地理教育研究団体等での発表及び研究の継続 教員対象に地域調査の実践例の発表及び地域巡検の実施等を通じて、地理学習の一助となる活動を継続したいと考える。また、日本国内を中心に研究をしたが、イギリス及びアメリカ等における先行事例を研究し、汎用性のある地域調査の方法を確立したいと考えている。</p>